

高齢者介護施設と地域とのつながりに関する考察 ～石川県加賀市にある小規模多機能型居宅介護の取り組みから～

キーワード：高齢者介護施設、小規模多機能型居宅介護
地域密着型、つながり、地域交流スペース

石井研究室

古館 駿
森 琢斗

1. 研究の背景と目的

介護保険の改正により 2006 年 4 月から「小規模多機能型居宅介護」（以下、小規模多機能と略す）が制度化された。地域密着型サービス（市町村自治体による計画・整備）の一つとして位置づけられる。小規模多機能は要介護者の在宅生活を支えるサービスで「通い」「泊まり」「訪問」という、それまでばらばらであったサービスを一つの事業所が個々の状況やニーズに応じて適切かつ柔軟に組み合わせ、地域社会から切り離すことなく支えることを可能とするものであり、国が進める「地域包括ケア」構想の中でも重要な役割を果たすことが期待される。

また、これまで介護施設は地域の中にありながらも地域社会から孤立し、閉鎖的な環境のもので設置・運営されることが少なくなかった。しかし昨今は地域の中で、いかに地域社会や地域住民とつながりながら、施設の介護サービス利用者だけでなく、地域の中で、地域住民に対してどのような役割を果たしていくかが求められる時代にもなった。

本研究では意欲的に地域との関わりを模索し、地域社会の中で、地域住民とともに歩む事業所を目指して開設した小規模多機能を事例として調査を行うことで、高齢者介護施設と地域とのつながりのあり方について考察することを目的とする。

2. 調査対象施設の概要

調査対象施設は石川県加賀市にある小規模多機能ホーム「きんめい」である。同施設は高齢者が多く暮らす地域で、介護を必要とせずとも一人で暮らす高齢者も地域に多数いることから、地域住民が気軽に立ち寄れる場所にしたいとの思いで計画された（表 1）。

空間的にも地域とのつながりを強く意識して計画された。地域のひとと気軽につながることを可能とする「交流テラス」を設置し、施設利用者も含めて利用可能な「地域交流室」も設けた。「地域交流室」や「通い」の利用者が滞在利用する「サロン（食堂・居間）」は通学路にもなる前面道路に面して設置されている。「交流テラス」は道路面からレベル差なしに直接つながり、道路の一部を取り込んだような計画として、施設と地域との垣根を取り払う工夫もされていた（図 1、写真 1）。

調査時点での登録者は 22 名（登録定員 24 名）で要介護度別の割合は図 2 のようになっている。

3. 調査の方法

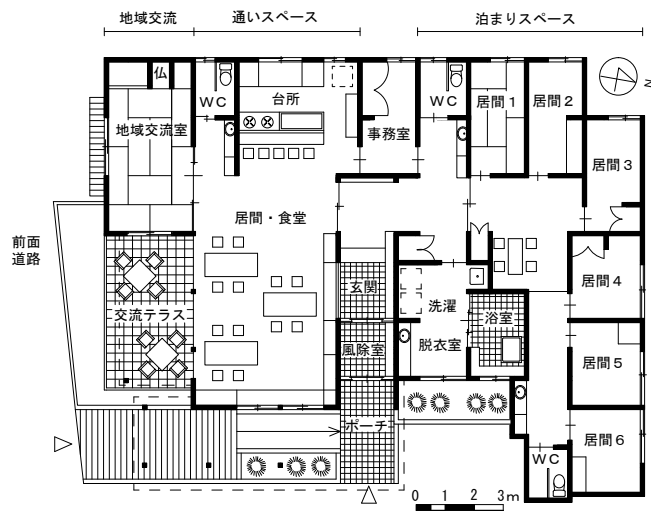


図 1. 調査対象施設の平面図

表 1. 調査対象施設の概要

所在地	石川県加賀市
運営主体	社会福祉法人共友会
開設年月	2014年4月
登録定員	24名
通い定員	15名
泊まり定員	6名
併設機能	地域交流スペース
敷地面積	676㎡
建築面積	281㎡
延べ床面積	242㎡（小規模多機能部分 215㎡）
構造/階数	木造/地上1階

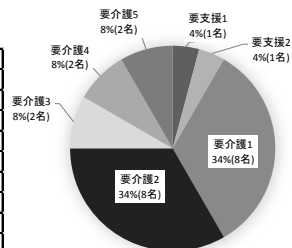


図 2. 登録者の要介護度（2016 年 10 月末時点）



写真 1. 地域交流スペースの活用状況

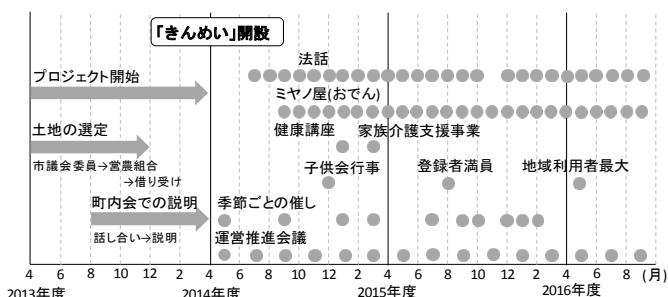


図 3. 開設前から開設後における地域との関わり方の取り組み

調査は2016年10月20～21日の両日実施した。調査は主に管理者・介護職員に対するヒアリング調査（調査1）と、開設から現在に至る2年6カ月分（915日分）の日々の介護記録の読み取りと記録の転記調査（調査2）である。調査1では開設前から開設後における地域とのつながりの工夫や取り組み、地域交流スペースの利用の実態等についてヒアリングした。

4. 結果と考察

4.1 地域を巻き込む工夫と地域利用者

「きんめい」では一般の地域住民にも施設に関わってもらうため、さまざまな工夫を行っている。開設前から自治会や町内会に積極的に足を運び、周辺住民に対しても施設設置の趣旨と地域とのつながりの重要性、さらにそれを目指す姿勢を訴え、協力を求めてきた。

空間的には「地域交流スペース」の設置が一つだが、その空間を活かす運営として、地域にも開放した（地域を呼びこむ）各種行事を開催している。開設後、定期的な行事（毎月開催の「おでん」）とともに季節ごとの催し（花祭り、七夕、夏祭り、紅葉狩り、クリスマス会、正月、節分、ひな祭り）も実施している。また、施設として地域の行事に参加する（地域に出て行く）こともある（図3）。

図4からは、開設当初から積極的に地域住民が施設に関わり行事等に参加している状況が読み取れる。施設の利用者（登録者）を増やすことが施設経営の安定につながるため、地域とのつながりを模索することは二の次として、登録者確保に全力を注ぐのが一般的である。しかし、「きんめい」では、登録者の確保と同様、それ以上に地域とのつながりを構築することを目指してさまざまな取り組んだことが図4からも明らかである。一般の住民に対して施設やサービスの認知度を上げることで、結果的には登録者の増加につながっているとも言える。行事時には10名前後の参加者があり、また日常的にも常時数人の住民が地域交流スペースに立ち寄り、利用している様子が確認された。

4.2 利用者の分布特性

「きんめい」の南側には住宅地、北側には田畑が点在する。前面の道路は小学校の通学路にもなっているため、地域住民や子どもたちの往来もある。そこに面して設置された交流テラスは、気軽に立ち寄り利用できるスペースとなっている。夏には飲み物を置き、誰でも自由にその場に滞在できるような状況を作り出している。

実際の地域利用者の分布を見てみると、多くが同施設の周辺徒歩圏（300m範囲）に居住している。一方で、登録者は車で送迎もあることから車で10～15分の県域に居住している利用者が多い（図5）。

5. まとめ

調査を通して「きんめい」の地域交流スペースの利用の様態や地域住民の関わりが明らかになった。地域に開

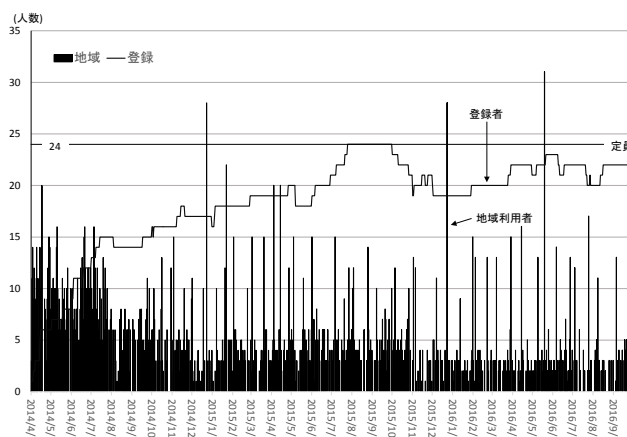


図4. 施設登録者数と地域利用者数の経年推移

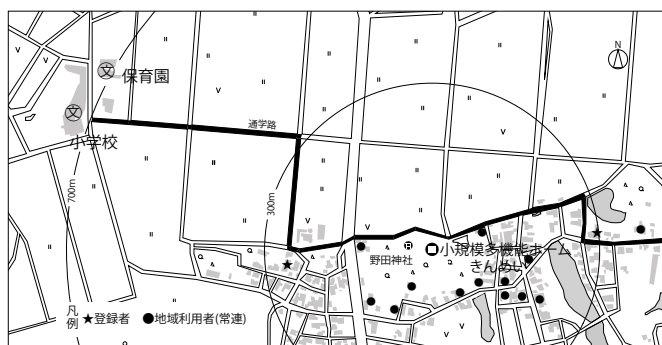


図5. 施設周辺の状況と利用者分布

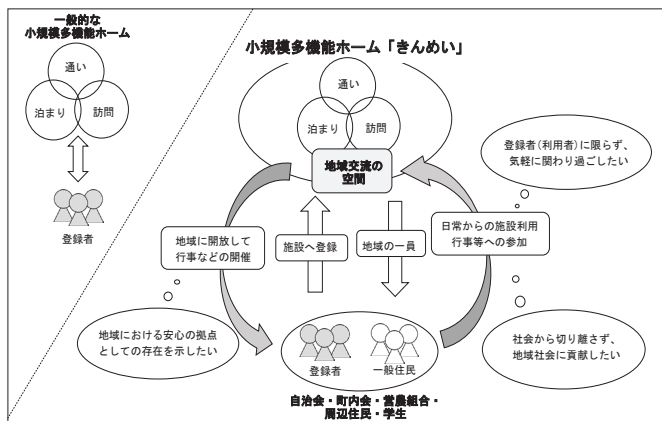


図6. 施設と地域とがつながる「きんめい」の取り組み

いた施設をコンセプトに、開設までに1年余りという期間を費やして開設したが、施設を知ってもらうための入念な呼びかけや説明会の開催、さらには空間的な工夫も功を奏して開設直後から地域住民が関わる施設となった。行事や催しの開催は「リピーター」を生み、日常でも気軽に訪れ、過ごすことができる場所として認知もされている。

最後に、図6は「きんめい」の特徴をダイアグラムとして示したものである。「地域」を意識した事業計画、建築計画、運営・実践が結果として登録者を増やし、安定した経営にも寄与している。地域利用者が介護サービスの登録者になったり、家族や知人が施設の存在を知り、さらに登録者を増やすなどの効果もあった。